『　日本女性会議 2012 仙台　』

報告書

江別市男女共同参画推進連絡協議会　副会長　福田三行

１　基調報告　　内閣府男女共同参画局長　佐村　知子
「日本の男女共同参画施策の現状と今後の課題について」

第３次男女共同参画基本計画の概要についての説明の後、2020 年に指導的地位に女性が占める割合を少なくとも３０％程度とする目標に向けた取り組みについては、現時点で達成できているのは、国の審議会等委員の３３．２％と薬剤師の６６．８％に過ぎない旨。

また、女性の参画指数の国際比較をみると、日本のＧＧＩ（ジェンダー・ギャップ指数）は１３５か国中９８位である。ＧＧＩは経済、教育、保健、政治の各分野の総合値であるが、日本は特に経済、政治分野における数値が低いことによる。

このことを改善するには、政策・方針決定過程への女性参画拡大を推進するためのポジティブ・アクション（クオータ制、ゴール・アンド・タイムテーブル方式、仕事と家庭の両立支援など）が必要であり、実現のためには、政治分野や行政分野への働きかけを行うことが求められる。

東日本大震災の後には、防災計画の策定や避難所運営、そして復興過程における意思決定においても、女性の参画が不可欠であるということが、強く打ち出された。

こうした背景を踏まえ、女性参画が必要な旨を盛り込んだ、防災基本計画の修正、災害対策基本法の改正が相次いでなされた。

また、国際的な働きかけとしては、第５６回国連婦人の地位委員会において、日本が初めて決議案として提出した「自然災害におけるジェンダー平等と女性のエンパワメント決議」が採択された。

２　特別プログラム　「女性たちが語る３．１１～これまでと今と」

ＮＰＯイコールネット仙台の宗片恵美子さんをコ―ディネーターに５名のパネリストが各々の立場で直面した大震災で経験した強い思いを訴えた。

ホテル経営者阿部さんの客に理解と協力を求めながらの長期にわたる奮闘ぶり、記者の丹野さんの罪障感にさいなまれながらの取材活動、そして震災後４日目で子育てふれあいプラザを開所し、心の傷ついた子供たちや母親を受け入れ、支援した伊藤さん、阪神・淡路大震災で被災し、今は岩手県でボランテァ活動支援を行っている石井さん、各人の熱い・重い発言内容に胸を打たれた。特に、福島県の二瓶さんが福島では未婚女性に対する「放射能防護教育」が今こそ必要であるとの訴えは、心に刺さった。婚約破棄、産まない選択などの問

題が、若い女性たちの間に現実に起きているという事実はとても衝撃を受けた

３　第１分科会　　復興・防災に女性の声を～出す、ひろう、生かす

河北新報社の佐藤理絵さんをコーディネーターに３名のパネリストが発表し意見を述べた。

前述の宗片恵美子さんは、２０１１年の９月、１０月に大震災を経験した宮城県内の女性３０００人を対象に実施した調査（回収率５０,４％）の結果にもとづき、家族構成の変化に伴う困難さ、避難所における不備や不安、現在抱えている困難などを分析し、６つの提言にまとめた。

男女共同参画からみる防災・災害復興対策に関する提言

ア　意思決定の場における女性の参画の推進
イ　女性の視点を反映させた避難所運営
ウ　多様な女性のニーズに応じた支援
エ　労働分野における防災・災害復興対策
オ　災害時におけるＤＶ防止のための取組の推進
カ　防災・災害復興に関する教育の推進

特に、避難所は多様な人が利用するので、女性だけでなく男性も障害者も入った避難所ワークショップが必要である旨。そして、いずれにしても実効性のある仕組みづくりをしなければならないと。

ＮＰＯ神戸まちづくり研究所の山地久美子さんからは、日本は男女共同参画の視点から、防災まちづくりには力を注いできたものの、復興まちづくりへの対策はこれまで殆んどなかったことを指摘し、次の提案があった。

ア　復興計画委員会・進行管理委員会は条例で定める
イ　復旧・復興計画を災害対策基本法で法定計画化し、自治体は条例化する。
ウ　まちづくり協議会に男女共同参画の視点を盛り込む
エ　復興基金（民間・公的）の創設と女性枠の設置
オ　女性の起業支援・活動支援のためのコンサルタントの派遣事業の創設

また、民間の復興基金である「フェリシモ　とうほくＩＰＰＯプロジェクト」が紹介された。

東京女学館大学非常勤講師の浅野幸子さんからは、大規模災害においては、他の地域からの支援が来るまでは無論のことその後の避難生活においても、地域住民による共助活動が不可欠である。このため、暮らしの場である＜地域＞

を基盤に支援の仕組みを作っていくことが最も効果的である。そして＜地域＞も自治会エリア、避難施設エリア、支所、自治体まで重層的な視点でとらえる必要がある。

4　記念講演　　女性のエンパワメント～ノルウェーからのメッセージ
ビデオメッセージ　グロ・ハーレム・ブルントラント（ノルウェー王国元首相）

災害リスクに関する計画のプロセスや復興過程においても、女性は中心的役割を果たすべきであり、何を行うべきかについて女性の意見を表明することが重要である。ノルウェーにおける男女平等社会確立の取り組みは、強い政治の活動と努力によって進展を遂げてきた。その結果、ノルウェー社会全体に恩恵をもたらした。現代社会が高齢化と出生率の低下に直面している今、ノルウェーは、労働力に女性が占める割合において欧州で１位にランクされており、また、欧州で最も高い出生率を誇っている。

エンパワメント、育児、介護、仕事を両立されることは可能であり，各国がそれぞれ自国に適した方法を見つける必要がある。しかし、いずれにしても、働く機会、そして子供や家庭の世話をする機会を男女双方に確保するには、＜政策や制度の改革＞が必要である。

社会変革は政治的判断があってからこそ実現されるものであり、そのためには、女性も政治活動に参加するなど、女性自身が変わろうとしなければならない旨。

講　演　　アネッテ・トレッテバルグステューエン（ノルウェー王国国会議員）

ノルウェー初の女性首相が誕生した１９８１年生まれの３１歳。

１２歳の時人種差別問題で街頭デモに参加し、翌年１３歳で労働党に入党したが、当時のブルントラント首相の大きな影響を受けた。市議会議員を経て国会議員になったが現在は２期目である。政治家を目指したのは、貧困や飢餓から救うことができるのは政治家だと思ったからとのこと。

女性が働くためには、幼稚園、産休制度、クオータ制度などの環境整備が必要であり、環境が整うと家庭と稼働は両立できる。ノルウェーでは国民の稼働率が、男性７９％、女性７１％と殆んど男女の差はない。また、現在、父親の２０％以上が産休を取っているし、出生率も１．９６％とヨーロッパ１位であ

る。国会議員の４０％が女性であり、内閣の５０％も女性である。女性はわが国の重要な資源である。昔、女性は家にいたし、いないといけない母だと言われた。男性も産休を取るとそんな男は軟弱だと言われた。しかし、これを変えたのが＜政治＞にほかならなかった。女性の労働市場への進出のためには、環境整備が必要であり、そのための政策や制度の改革を政治で決定しなければならない。その努力を惜しんでは＜どんな人でも仕事と家庭が両立できる社会＞の実現は困難である旨。

５　シンポジュウム　　きめる、うごく、東北から

東北大学の辻村みよ子さんをコーディネーターに、コメンテーターとして前千葉県知事堂本暁子さんとトレッテバルグステューエンさんに、パネリストとして東レ経営研究所の渥美由喜さん、ＲＱ被災地女性支援センターの石本めぐみさん、北海道から地域づくりを創造・発信する場づくり師の日置真世さんの６人のメンバーで被災地の復興、地域再生の取り組みについて発言する。

辻村さんからは、女性の管理職を育てるためには、ロールモデルを育てることやメンタルの相談窓口を制度化するなど訓練とエンパワメントが必要である旨。堂本さんからは、女性も男性と同様に意思決定の場に参画することが必要であり、まずは政治参加、次いで経済参加と段階を踏む必要がある旨。渥美さんからは、介護と仕事の両立は可能であり、組織における凍土層を溶かす方法としては、共感性が第一である旨。石本さんからは、普段できていないことは震災でもできない旨、また、多様性にも配意すべきであると。日置さんからは、まずやってみること、そしてあきらめないことが大切であり、いかに＜つながり＞を駆使し広げるかがポイントなる旨。トレッテバルグステューエンさんからは、女性参画をただ自然に待っていてはだめで、いつになってもできないであろう。議論が起きるように働きかけをし、制度の仕組みづくりを行わなくてはならない。そのためには、女性は発言をしなければならないし、政治に参加し、そして経済にも参加しなければならない旨。

以上が日本女性会議の概要報告です。

最後に会議に出席した感想について

初めて日本女性会議に出席させていただいたが、私自身とても勉強になり、参加してよかったと感謝している。ただ、参加者が全国から２０８０名のうち

男性がわずか１９６名しかいなかったのは誠に残念に思えた。積極的に男女共同参画を進めるためのこの会議は、まさに内容的にも素晴らしいものであった。しかし、この内容は女性もさることながら、むしろ男性にも知ってもらうべき内容であり、そうしなければ、せっかくの男女共同参画の推進を目指すこの会議の意義そのものが半減しているのではないかと強く思った。

交流会の席上で、私は２人の女性から「あなたはどういう立場で参加しているのですかと」聞かれ、正直、戸惑った。なぜなら、私はこの会義への男性の参加は当然だと考えていたからだ。端的に言わせてもらえるならば、この会議の名称が単に＜女性会議＞であったからであり、これが＜男女共同参画会議＞であったならば、なんの問題にもならかったことでなかったのかと。そして、むしろそのほうが新たな展開を期待できたのではないかと思った。